

少子化による生徒の変化と塾での指導への影響は？

——大学選びは偏差値軸から多様な特色軸へ。年内入試対策の入塾生も増加中。

東京個別指導学院 関西個別指導学院

教務・サービス開発部

進路指導センター開発課 石川 満 氏 西日本事業部長 奥山 亨 氏

1985年創業の小・中・高校生向け個別指導塾。東京、神奈川、埼玉、千葉、愛知、京都、大阪、兵庫、福岡にて272校。塾生は約3.2万人。

——近年の塾市場の動向は？

少子化の中でも、塾市場は伸びています。育てる子どもの数が少ない分、1人当たりの教育費が右肩上がりだからです。「わが子に合った」指導を求め、個別指導塾を選ぶ保護者が増えています。また、今まで偏差値上位大学をめざしていたような学力中間層の生徒様が、偏差値中堅の大学に進学するようになりました。入試の変化により受験勉強をがんばる必要性が低下しているため、学習意欲や学力の低下を懸念しています。教育のDX化が進み、個別最適な学習が推奨されていますが、デジタル教材を使いこなして、学習効果を出せるのは、自学自習の習慣を持つ学力のある層です。学習習慣があまりない層は、人が寄り添わないと勉強に向かえないため、当塾のような個別指導塾にいらっしゃるようです。

——入塾生の昨今の変化は？

当塾は生徒様、保護者様も参加してカリキュラムを作成するのが特長です。以前は日々の授業の学習支援が中心でしたが、今は大学受験のために入塾する生徒様が増えているため、高1のときから受験情報を提供し、面談を行います。画一的な情報提供ではなく、学部の特徴なども時間をかけて丁寧に説明し、大学見学のご案内をすることもあります。入試が、保護者様世代のものとは大きく様変わりしており、特に都市部の大学は選択肢が多いため、エビデンスに基づいた入試情報の提供が求められています。生徒様の年齢的に親子の対話が難しいご家庭もあるため、両者の間に立ち、互いの希望や意向をくみ取った指導にも努めています。

——年内入試の拡大による変化は？

高3から駆け込みで入塾したり、指定校推薦や内部進学対策用に塾を利用したりする生徒様は増えています。一般選抜で合格

しやすくなったとしても、このトレンドは続くでしょう。通塾生の中には上位大学に合格できる生徒様でも、中堅大学に年内入試で合格すれば入学します。保護者様も無理に上位大学を受けさせないし、中には上位大学受験を止める保護者様もいます。偏差値という縦軸だけではなく、大学の特色という横軸でも大学選びをするようになってきたからでしょう。この動きは私立中学・高校受験ですでおきており、「理系女子特化」「アントレプレナーシップ教育」など、自校の教育の特長を募集広報で打ち出しています。その流れが、大学に波及しているのです。年内入試では志望理由を書くため、生徒様は大学の中身を調べます。大学側も、オープンキャンパスなどで教員や学生と話せる機会を設けています。そうした体験を通じ、自分がそこに通い、やっていけそうだというイメージがつけば、偏差値にとらわれず志望する生徒様もいます。

一方で、年内入試といってもさまざまです。東北大学のように高い学力を持ち、さらにアクティブで主体性のある学生を年内入試で選抜する大学もあれば、学力不問の年内入試もあります。関西エリアの私大はシンプルな学力試験が中心で、大学も高校も受験生もお互いメリットがあるようです。批判を受けた東洋大学の学力検査型の学校推薦型選抜は、大学のポジションからすると難しいかじ取りの中で、合理的な選択でしょう。同大学は数学重視の一般選抜を長年続けており、学力担保へのポリシーが感じられます。

——大学の塾に対するコミュニケーションについての期待は？

講師である学生を通じて難関大学の様子はわかる一方で、中堅大学については知る機会が少ないのが実情です。その意味でも、塾向けの説明会はキャンパス内での実施を希望します。実際の学生の姿や施設の様子など、リアルな情報があれば、その大学を勧めるときの説得力が増すからです。また、入試変更点の説明と併せて「変更の背景にある大学の考え方」を伝えていただきたい。年内入試で学力試験を課するのであればその理由を、課さないのであれば学力をどのように育成するのかについて知りたいです。生徒様にマッチする大学を勧めるためにも、これまで以上に大学とは連携し、情報交換をしたいと思います。